

# 就 業 形 態 と 生 活 の 質

片 岡 洋 子

## 1. 問題設定

### 1.1 有配偶女性の生活の質と就業形態

女性の職業選択の機会は広がっているにもかかわらず、女性の就業継続は難しく、男女の賃金格差も開いたままである。その原因のひとつは、結婚した女性が専業主婦となり、あるいはパートタイムで働くという就業形態の多様性があげられる。有配偶女性の半数以上が働いているにもかかわらず、フルタイムで働く選択をする女性が少ないのだろうか。パートタイム賃金はフルタイム賃金と比べ低いことが知られている。日本は他の先進国と比べて、フルタイム・パートタイム賃金格差が大きい。にもかかわらず、パートタイムが選択されるのはなぜであろう。家事や育児の負担や雇用差別によって、選択したくてもできないという、制約の多さからも説明可能であるが、むしろ積極的に専業主婦やパートを選んでいるとも考えられる。<sup>(1)</sup> 本稿は、この積極的な選択の背景を探る。

日本の女性の特徴として、男性（夫）が収入を得てもその収入は、夫婦のものであるという意識が外国に比べて高い。<sup>(2)</sup> また失業率の低さから夫の収入に依存しても家計が安定してきたことも、妻が働いて収入を得る必要を感じさせてこなかったひとつの理由であろう。むしろフルタイムで働くことによるデメリットが、女性に働かない、あるいは働くけれどもパートで、という選択肢を選ばせているのではないか。フルタイムで働くことは、一日の大半を仕事のために費やすだけではなく、仕事以外の交友関係を制限する。さらに、同じ仕事を同じ期間続けていても女性の賃金は男性のそれと比較すると低い。低賃金でもいいのでとにかく仕事をしよう、という気持ちをもてない女性が多いのではないか。豊かな生活のためには、外で仕事を持たないほうが得策であると考えられるのではないか。女性の働き方は男性の働き方と密接に関係しており、男性の長時間労働が家事労働の負担を増し、そのために、家事以外の仕事のために時間を割けない、だからフルタイムは無理だが、パートタイムで働こうという、選択を余儀なくさせてきた、ということも考えられる。家事労働は無償であるが、外で働く有償労働と、両方をこなす負担を考えると、フルタイムでの就業は「豊か」ではない生活、ということにもなりかねない。

どのような生活が豊かな生活といえるのか、言い換えると生活の質を何によってとらえるか、については各人によってさまざまな基準が考えられる。

先行研究からは、収入の多さなど経済的要因の影響が繰り返し指摘されている。だが、収入はそれだけでその人の生活の質を決めるわけでもない。収入といっても、結婚している女性の場合、本人の収入だけでなく夫の収入が大きい。そして木村によると、収入の額だけでなく、誰が収入を管理しているかもかかわっている。夫妻の経済関係（夫や妻の収入のどれだけが家計となり、誰が管理するか）は、夫婦関係満足度を規定する。特に専業主婦の場合、夫婦関係満足度に夫妻の経済関係は高い説明力を持つが、この理由を収入のない妻にとって、夫との関係に対して家計要因が大きいと考察している（木村、2004）。

夫の働き方と、妻の就業選択を分析したものに『国民生活白書平成13年度版』がある。これによると、夫の就業時間が長いと、パートタイム就業や無業を選択する確立が高まり、夫婦の親が同居していると、フルタイム就業の選択確率が高まる（内閣府、2002、73ページ）。この分析では、夫の就業時間だけでなくさらに、保育所の充足度が妻の就業可能性を高める鍵とみている。ここには妻の就業をすすめたいという分析者の価値判断が見てとれる。しかし、就業していればそれだけで幸せとは考えられない。働くことによって生活が良くなると働く本人が思わなければ、就業可能性がいくら高くなっても働くという選択は行われたいのではないか。

生活に満足しているかどうか、生活満足度を直接訊ねることも生活の質を知る一つの方法である。主観的な満足度と、それを規定する要因を探る研究も多い。ただし、主観的満足度には、問題があることも知られている。恵まれない状況に置かれた人でも、常に不満を抱いて生活しているわけではなく、その状況にあわせて、自らの満足水準を下げるため、これだけで各人が置かれた状況を判断することはできない。

先行研究から、生活満足は、夫婦関係満足、結婚生活の理想と現実、収入満足から影響を受けることがわかる。この影響の度合いには、男女差が見られる。色川によると、夫婦とも持ち家、年収、資産などの変数が生活満足度に大きな影響を及ぼしている。しかし、妻の就業形態によって生活満足度は異なり、妻は夫と同等に働く場合に生活満足度が高く、夫は、妻がパートで働くタイプで満足度が高い（色川、2001、38ページ）。妻の就業形態別の分析が必要である。

生活の質は、家庭の内外でのサポートからも影響を受ける。家族内での絆の強さによって、例えば夫婦間の情緒的サポートや夫婦間の会話頻度からとらえるのも一つの考え方である（野沢、2001）。夫婦間のサポートは、夫婦の相対的所得によって異なる。夫妻の収入が対等である世帯で妻は夫がサポートしてくれると認識している（重川、2004、42ページ）。ここでサポートは、「悩みや心配事を聞く」、「能力や努力の評価」によって得点化されている。

妻が就業するかどうかは、性別役割分業意識にも影響を受ける。性別役割分業意識とは、例えば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」、「夫に十分な収入がある場合は、妻は仕事をもたないほうがよい」といった考え方である。JGSS-2000からは、妻が就業している場合よりも、就業していない場合の方が、性別役割分業を肯定する率が高いことが知られている（岩井、2002、23ページ）。

## 1.2 ケイパビリティ・アプローチの導入

本稿は、女性たちが高い生活の質を求める結果、フルタイムという働き方を選択する女性が増えないのではないか、という問題意識に立ち、生活の質をとらえるための概念としてケイパビリティ (capability) を利用する。

ケイパビリティとは、ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが考えた概念で、人が行うことの出来る様々な機能 (ファンクショニングス) の組合せ (Sen, 1995, 邦訳59-60ページ) を意味する。機能とは、人々が実際に何をすることができ、どのような状態になれるか、幾通りかの生き方から選び取られたものである。重要な機能とは例えば、「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」などの生きていく上で基本的なものから、「幸福であるか」「自尊心を持っているか」「社会参加しているか」といった複雑なものまである。さまざまな機能を満たされている場合、「独立したキャリアを歩む自由がある」といったケイパビリティが実現され、生活の質の高さを表すことができる。

日本において、女性が若いうちから独立したキャリアを歩む自由は、男性と比べ制約を受けている。これを単に収入やサポート、主観的満足度からみるのではなく、選択可能な選択肢の多さから見ようと考えるのが本稿の試みである。その際、主観的満足度との関係も視野に入れる。主観的満足度をそのままケイパビリティの指標とするのではなく、一定の関連があるものとしてとらえる。

これまでケイパビリティ・アプローチは主に開発の分野で用いられてきた。国連開発計画 (UNDP) の人間開発報告書 (Human Development Report) に影響を及ぼしている。途上国の女性に応用した研究は「女性と人間開発」として翻訳された。この中で、著者のマーサ・C・ヌスbaum (Martha C. Nussbaum) は、ケイパビリティリストを示している。これはインドの女性の状況をもとに作成されたリストなので、そのまま日本への応用はできないが、国際ケイパビリティ学会では、近年、ケイパビリティ・アプローチの先進国への応用も進められている。<sup>(3)</sup>

本稿は、先進国の女性にとっての生活の質をとらえるために経済力、夫婦関係、(夫婦外からの) サポートの3種類の尺度と、主観的満足度の関係に注目する。生活の質を構成する要因を特定し、それらが主観的生活全般の満足度とどのような関係にあるのかを構造方程式モデルによってモデル化する。女性の就業形態別に、生活の質の高さを調べ、それらと主観的満足度の関係がどのように異なるのかを明らかにする。

## 2. 概念・理論枠組み・仮説

### 2.1 概念

生活の質<sup>(4)</sup> をはかるためにケイパビリティ概念を用いる。ケイパビリティとは選択肢の集合の中から結果的に選ばれた機能の組み合わせである (Sen, 1995, p. 217)。機能の種類は、さまざまなものが想定可能であるが、本稿では、先進国である日本の、結婚している女性にと

っての中心的機能として、次の3つの尺度を用いる。それぞれの尺度を、選び取られた機能(ファンクショニングス)と考える。第一に生活していくうえで十分な経済力、第二に良好な夫婦関係を維持し夫から精神面でのサポートをうけるだけでなく時間的な余裕を持つ手助けを受けること、第三に核家族のメンバー以外の人間関係から得られるサポートの3つである。

## 2.2 理論枠組み

生活の質を表すための3つの尺度は、以下のように構成する。

まず、生活していくための「経済力」を以下の変数によってあらわす。妻の年収は、自らが働いて収入を得ることによって、豊かな生活を送ることを示す。それだけでなく、夫婦の資産、夫が収入を得ていることも経済力を示す。また実際には働いていない場合でも、高い学歴は仮に働いた場合の収入を高める可能性があり、経済力に含める。

次に、夫婦関係であるが、夫婦間の良好な関係が精神面と時間的側面から生活の質を高める。夫婦間の会話頻度が多ければ、良好なコミュニケーションが取れていると見ることができる。夫から能力を評価されるなど夫からのサポートを受けられる場合や、逆に夫が面倒をかける、イライラさせる場合には、ストレスを受ける。この夫からストレスを受けないことも、夫婦関係の良好さを示すと考えられる。精神面でのサポートだけでなく、夫が家事に時間を割くことは、妻の家事を減らすことができていると考えられ、時間的な余裕を生むと考えられる。自由になる時間があることは、生活の豊かさに加えて重要な意味を持つと考えられるため、これを夫婦関係の良好さの要素に含める。

三つ目の、家庭外のサポートは、夫以外の誰かのサポートを受けることができるかどうかを示す。結婚している女性の生活において大きな意味を持つことは、ケイパビリティ・アプローチによる先行研究の中でも、ヌスバウムによるインドの女性グループの存在がいかに女性たちの状況を良くするかを示している(Nussbaum, 2000)。核家族のメンバー以外のサポートをうけることにより、能力を認めてもらい、困ったときの助けを受けたりすることで、高い生活の質が実現される。サポートを受けることができる人の人数を合計して用いる。<sup>(5)</sup>

これら3種類の機能を得点化し、専業主婦、パート、フルタイムという就業形態の違いによって、実現されている機能のレベルの差を明らかにすることができる。また、主観的な生活満足度に対して、3種類の機能が就業形態別に異なる影響を与えているため、重視するものの違いが働き方の違いを生んでいるとも考えられ、その違いも明らかにする。

## 2.3 分析仮説

女性の就業形態によって生活の質の差があるかを捉えるため、以下の3つの仮説を立てた。

【仮説1】フルタイムで働く女性ほど、経済力が高い。

フルタイムは、パートタイムで働くよりも高い収入を得ることができる。また夫の収入とあわせても資産を形成することが容易であることから、経済面での機能得点が高くなると考えら

れる。

【仮説2】経済面以外の機能は、就業形態による差がない。

夫婦間の関係の良さは、夫からの精神的なサポートに加えて、家事分担によって妻に時間的余裕を与える。友人からのサポートは、就業形態によらず、重要であると考えられる。これらの機能は、就業形態による高低はないと考えられる。

【仮説3】3種類の機能を規定する要因、機能間の相互関係、そして、機能それぞれが主観的満足度に影響を与えるかどうかは、就業形態によって差がある。

### 3. データと変数

#### 3.1 データ

分析に使用するデータは、財団法人・家計経済研究所によって実施された「現代核家族調査」によって収集された調査票調査データである。この調査は東京30km圏に居住し、妻の年齢が35から44歳の核家族世帯を対象としている。1999年7月に、夫、妻、同居している子供の3者を対象に、訪問留置法により実施された。

調査の内容は、『新現代核家族の風景：家族生活の共同性と個別性』大蔵省印刷局（2000）として出版されている。また調査の目的と実施状況は、『季刊家計経済研究』2001年冬号（49号）にも記載されている。

サンプルは、調査地点を100地点とし、住民基本台帳から層化二段階抽出法により抽出された2000世帯である。回収世帯は984世帯、うち有効票回収世帯は934世帯である。以下の分析では、欠損値のあるデータを除いた742世帯を使用する。この調査は妻と夫、子供の3者を対象としているが、本稿で利用するのはもっぱら妻のデータで、夫は年収だけを用いる。

#### 3.2 変数

生活の満足度を得点化するために用いる変数は下記の通りである。

〈経済力〉

妻の年収：調査では昨年1年間の収入（税込み、年金や利子収入・不動産収入等も含む）カテゴリーでたずねているため、「50万円未満」を49万、「50万—103万円未満」を76.5万、以下中間値を、「1000万円以上」を1000万とし、その値の対数値を用いた。ただし、年収「なし」は0にすると、対数変換できないため、1として、対数値が0になるようにした。なお、妻が専業主婦である場合も、年収なしとは限らない。これには二つの理由が考えられる。一つ目は、昨年の年収を聞いているため、昨年まで勤めていた人が含まれる。二つ目は、年金、利子、不動産収入があるためである。

夫の年収、夫婦の資産も、妻の年収同様、対数に変換した値を用いる。

妻の学歴は、卒業した学校別に年数に変換した。中学卒業を15、高校卒業を18、短大・高専卒業を20、大学卒業を22、大学院卒業を24とした。

〈夫婦関係の良好さ〉

夫婦の会話：調査では「1. よく話す」から「6. まったく話さない」という6段階で会話の頻度を尋ねている。これを「よく話す」を6、「まったく話さない」を1へと変換した。

夫の家事：色川（2004）にならい，料理，料理の後片付け，洗濯，掃除のそれぞれを，ほぼ毎日を29.25，週に4・5回を20.25，週に2・3回を11.25，週に1回を4.5，1ヶ月に2.3回を2.5，まったくしないを0として，合計した。

夫のサポート：夫からプラスの影響を受けるであろう4つの質問の「あてはまる」を4，「あてはまらない」を1として，合計した。質問は「夫は私の心配事や悩みを聞いてくれる」「夫は私の能力や努力を評価している」「私は夫の心配事や悩みを聞いてあげる」「私は夫の能力や努力を評価している」の4つである（Cronbachの信頼性係数 $\alpha = .81$ ）。

夫ストレス（逆転）：夫からマイナスの影響を受けるであろう3つの質問を「あてはまる」を1に，「あてはまらない」を4として合計した。質問は「夫は私のすることに文句や小言をいう」「夫は私にいろいろと面倒をかける」「夫といるとイライラすることがある」の3つである（Cronbachの信頼性係数 $\alpha = .71$ ）。

〈サポート〉

サポートしてくれる人の数を，合計した。

悩み：「心配事や悩み事を聞いてくれる人」自分の親，夫の親，自分のきょうだい，夫のきょうだい，親戚，職場の人，近所の人，その他の友人，最大で8人となる。なお専業主婦の回答にも「職場の人」と答えているものがあり，これもデータに含めた。年収同様以前勤めていた友人が含まれている可能性がある。

能力：「能力や努力を評価してくれる人」同様に最大8名となる。

看病：「看病や家事を頼める人」

手伝い：「気軽に手伝いを頼める人」

〈主観的満足度〉

満足度：調査では「あなたは生活全般に満足していますか」1満足→5，2まあ満足→4，3やや不満→2，4不満→1，5どちらともいえない→3と変換した。6わからないは欠損値とした。

表1 記述統計

変数名	就業形態	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
経済力 妻年収（対数）*	無職	391	1.86	4.72	0	16.12
	パート	221	12.47	3.62	0	15.20
	フル	130	15.03	1.52	0	16.12
	合計	742	7.33	7.08	0	16.12
夫年収（対数）	無職	391	15.71	0.88	0	16.12
	パート	221	15.63	0.39	14.61	16.12
	フル	130	15.67	0.37	14.61	16.12
	合計	742	15.68	0.69	0	16.12
夫婦の資産（対数）*	無職	391	16.40	0.93	15.42	17.99
	パート	221	16.20	0.84	15.42	17.99
	フル	130	16.55	0.97	15.42	17.99
	合計	742	16.37	0.92	15.42	17.99
教育年数（妻学歴）*	無職	391	19.45	1.71	15	24
	パート	221	18.94	1.67	15	24
	フル	130	20.09	1.99	15	24
	合計	742	19.41	1.79	15	24
関係の良さ	無職	391	4.57	1.10	1	6
	パート	221	4.58	1.18	1	6
	フル	130	4.68	1.33	1	6
	合計	742	4.59	1.16	1	6
夫の家事*	無職	391	8.68	13.37	0	99
	パート	221	10.15	17.12	0	117
	フル	130	19.67	21.27	0	90
	合計	742	11.04	16.61	0	117
夫のサポート	無職	391	3.04	0.64	1	4
	パート	221	3.10	0.68	1	4
	フル	130	3.11	0.74	1	4
	合計	742	3.07	0.67	1	4
夫ストレス（逆転）	無職	391	2.76	0.77	1	4
	パート	221	2.72	0.79	1	4
	フル	130	2.68	0.77	1	4
	合計	742	2.74	0.77	1	4
サポート	無職	391	2.67	1.39	0	8
	パート	221	2.65	1.45	0	8
	フル	130	2.48	1.50	0	7
	合計	742	2.63	1.43	0	8
サポートして くれる人数（能力）	無職	391	2.21	1.55	0	7
	パート	221	2.36	1.69	0	8
	フル	130	2.32	1.61	0	8
	合計	742	2.28	1.60	0	8

変数名	就業形態	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
サポートしてくれる人数（看病）	無職	391	1.61	1.04	0	6
	パート	221	1.56	1.13	0	6
	フル	130	1.57	1.11	0	7
	合計	742	1.59	1.08	0	7
サポートしてくれる人数（手伝い）*	無職	391	1.74	1.27	0	7
	パート	221	2.06	1.38	0	7
	フル	130	1.71	1.30	0	7
	合計	742	1.83	1.32	0	7
生活全般満足	無職	391	3.59	1.00	1	5
	パート	221	3.54	0.95	1	5
	フル	130	3.64	0.88	1	5
	合計	742	3.58	0.97	1	5

\*は、差が有意であったもの。

就業形態の違いは「職業にはついていない」を専業主婦（無職）、「パートタイムのアルバイト」をパートタイムに、「公務員」と「民間の企業・団体の正規職員」「フルタイムの臨時職員」をフルタイムとし、自営業は分析から除いた。

### 3.3 分析手法

それぞれの変数ごとに、女性の就業形態別に差があるか、一要因の分散分析を行う。次に、直接観測できない経済力、夫婦関係、サポートを、上記の観測できる変数をもとに潜在変数を作成し、構造方程式モデルによってモデル化する。モデルを作成するにあたって因子分析を行った。因子分析の結果は省略する。

## 4. 分析結果

### 4.1 就業形態別経済力の差

妻の就業形態が、無職（専業主婦）、パートタイム、フルタイムのいずれであるかによって、経済力に違いがあるか調べるため、分散分析を行った。その結果、夫の年収だけは非有意であるが、妻の年収は自由度（2,739）のF値が785.93、1%水準で有意である。資産は、F値6.64、妻の学歴もF値18.02、1%水準で有意である。よって、仮説1は支持された。

Tukey法（Tukey HSD法）による多重比較の結果、資産は、専業主婦とパート、パートとフルタイムの間で有意に差がある（0.1%水準）。妻の年収（0.1%水準）と、教育水準（5%水準）は、すべての組み合わせで有意に差があった。

#### 4.2 就業形態別夫婦関係の良好さと、サポート

夫婦関係の良好さと、サポートについても、分散分析を行った。夫の家事時間と、サポートしてくれる人（手伝い）を除くと、いずれも差は有意ではなかった。夫の家事は自由度（2,739）のF値が23.11、1%水準で有意である。サポートしてくれる友人は自由度（2,739）のF値が4.96、1%水準で有意である。夫の家事時間は、フルタイムで有意に長く、手伝いを頼める人数はパートで有意に多い。しかし、この2つを除くと、就業形態による差は有意ではなく、仮説2はほぼ支持された。

Tukey法（Tukey HSD法）による多重比較の結果、夫の家事時間は、専業主婦とパート、パートとフルタイムの間で有意に差がある（0.1%水準）。手伝いを頼める人は、専業主婦とパート、パートとフルタイムの間で有意に差がある（5%水準）。

#### 4.3 就業形態別の機能の規定要因、相互関係、満足度への影響

構造法式的モデルにより、経済力・夫婦関係の良好さ・サポートの3尺度の各要因と、相互

図1 モデル図

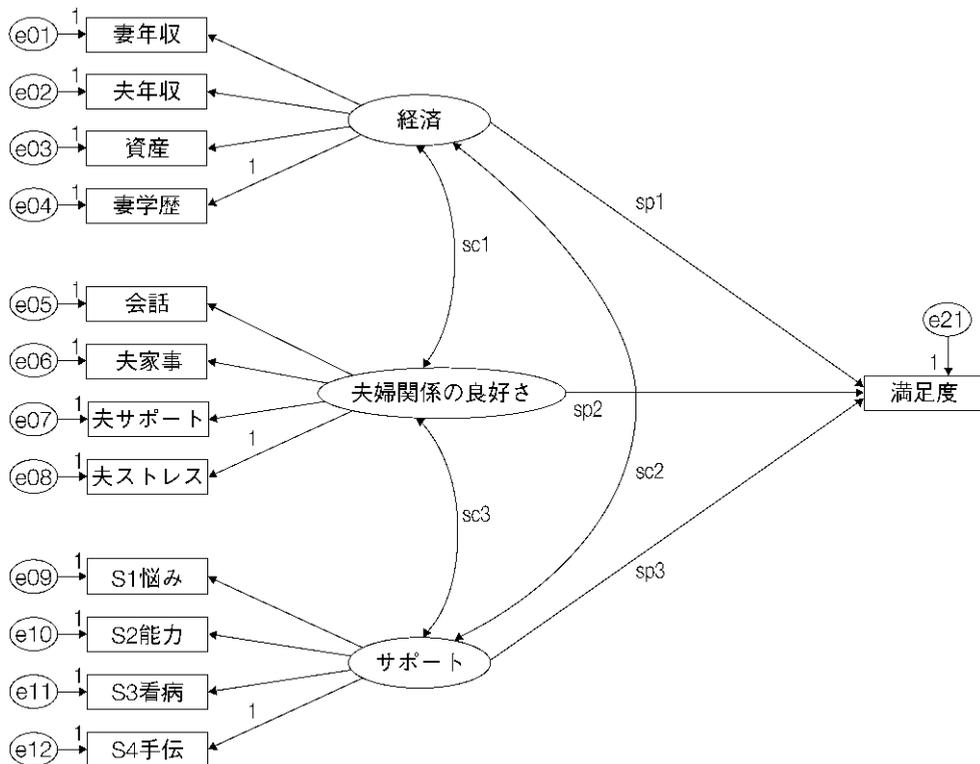


図1は専業主婦のモデルをあらわしている。

ラベル名は、専業主婦は先頭にs、パートはp、フルタイムはfをつけた。改良モデルの制約は、sp1=pp1=fp1、pc1=fc1、pp2=fp2、fc3=pc3、sc2=pc2=fc2の5つをおいた。

表2 パラメータ推定結果

		標準化係数推定値		
		専業主婦	パート	フルタイム
妻学歴	← 経済	0.40	0.41	0.56
資産	← 経済	0.57***	0.64***	0.58***
夫年収	← 経済	0.37***	0.69***	0.47***
妻年収	← 経済	0.09	0.01	0.33**
夫ストレス	← 夫婦関係の良好さ	0.22	0.47	0.42
夫サポート	← 夫婦関係の良好さ	0.93***	0.78***	0.98***
夫家事	← 夫婦関係の良好さ	0.12†	0.07	0.10
会話	← 夫婦関係の良好さ	0.66***	0.72***	0.66***
S4手伝	← サポート	0.67	0.63	0.73
S3看病	← サポート	0.66***	0.62***	0.58***
S2能力	← サポート	0.74***	0.82***	0.72***
S1悩み	← サポート	0.68***	0.77***	0.77***
満足度	← 経済	0.19***	0.20***	0.33***
満足度	← 夫婦関係の良好さ	0.37***	0.35***	0.34***
満足度	← サポート	-0.04	0.14†	-0.02

p<.001\*\*\*, p<.001\*\*, p<0.5\*, p<.10†

表3 相関係数

		専業主婦	パート	フルタイム
経済	↔ 夫婦関係の良好さ	0.046**	0.208*	0.146*
経済	↔ サポート	0.173**	0.173**	0.098**
夫婦関係の良好さ	↔ サポート	0.263**	0.293**	0.3**

p<.001\*\*\*, p<.001\*\*, p<0.5\*, p<.10†

関係、主観的満足度への影響をモデル化した。3尺度に相互に関連があることを想定している。

構造方程式モデルは、共分散構造分析とも言われる。例えば人の知能や各種能力、景気や経済力といったものは、直接測定できない。これらは「構成概念」と呼ばれ、潜在変数によってあらわす。構成概念に関連する複数の測定値の組合せでものさしを構成する方法が一般的である。因子分析では、構成概念と観測値の間の関係を明らかにするもので、因果関係は問わない。回帰分析では観測変数の間の因果関係を扱うだけで、構成概念は扱わない。共分散構造分析は、因子分析と回帰分析を一体にした分析法といえる(山本・小野寺, 2002, 1ページ)。

まず、制約のないモデルをモデルの全体的評価を示す適合度指標 GFIは0.936, AGFI=0.903, RMSEA=0.033, AIC=506.891となり、構成した方程式モデルとデータとの適合は十分である。次にパラメータ間の差に対する検定を行い、有意な差が見られなかったパスに制約をおいた。改良モデルの適合度指標 GFIは0.935, AGFI=0.906, RMSEA=0.032,

AIC=496.772となった。

#### 〈規定する要因〉

夫婦関係の良好さを規定する要因の中で、夫の家事はパートとフルタイムでは有意ではなく、専業主婦でのみ10%水準で有意である。標準化係数の値も小さいため、夫の家事は夫婦関係の良好さに影響を与えていない。標準化係数の値が最も高いのは、夫のサポートで、就業形態別ではフルタイムで最も高い。夫のサポートは、妻就業形態別にパラメータの差が有意であった。

経済力を規定する要因のなかで、妻の年収が有意なのはフルタイムだけであった。夫の年収および資産はいずれの就業形態でも有意であり、標準化係数が最も高いのは、パートである。夫の年収は、パラメータ間の差に対する検定が有意であった。

サポートは、就業形態別に差は見られない。係数についてみると、能力や努力を評価してくれる人および悩みや心配事を聞いてくれる人の値が、パートタイムで最も高い。気軽に手伝いを頼める人はフルタイムで高く、看病を頼める人数は専業主婦で高い。

#### 〈相関〉

就業形態別に、各機能の相関関係に差が見られた。

専業主婦では、夫婦関係の良好さと経済力間に相関がなく、フルタイムでは、経済力とサポート間にも相関がない。パートタイムだけが、3種類の機能すべてに相関関係が見られた。

#### 〈満足度への影響〉

経済力と夫婦関係の良好さから満足度への影響は、いずれの就業形態でも有意である。差が見られたのは、サポートから満足度への影響で、パートでのみ影響がある。ただし確率5.3%であるため厳密には5%水準で有意とはいえないが、係数がパートでのみプラスになっており特徴的である。

就業形態による差が見られるため、仮説3は支持される。

## 5. 結論と考察

フルタイムで働く女性の経済力は、予想通り専業主婦やパートと比べて高い。妻の年収だけでなく、資産、学歴ともに他の就業形態と比べて統計的に高くなっている。表1の対数を直感的にわかりやすいよう常数にすると、妻の年収平均値は、専業主婦はほぼゼロ、パート26万（対数值12.47）、フルタイムは337万（対数值15.03）である。夫の年収は専業主婦で665万、パートで614万、フルタイムで639万である。夫婦の資産は、専業主婦で1326万、パート1085万、フルタイム1540万である。夫の年収も夫婦の資産も、フルタイムが高い。

フルタイムで働くことが経済的に豊かな生活を送ることにつながるといえる。ただし、夫の年収が最も高いのは専業主婦であり、これは夫の稼ぎが多いからこそ、妻は働く必要がないと

見られる。経済面で最も恵まれないのはパートである。

しかし、友人面では、パートが恵まれている。手伝いを頼める人数は、パートで最も多い。同居している家族以外で助けを求めたり、頼れる相手の人数合計が最も多いのはパートであった。ただし、統計的に有意な差があるのは、手伝いを頼める人数だけであり、ややパートが恵まれているものの就業形態間での差はないといえる。

夫の家事時間が最も長いのはフルタイムの家庭で、夫婦間で家事を分担していると見られる。夫の家事分担が、妻の家事負担を軽くするものの、夫婦関係の良好さをあらゆる潜在変数に対してパートタイムとフルタイムで有意ではなく専業主婦でのみ10%水準で有意なだけである。夫の家事の影響は小さく、一方夫のサポートの影響が大きい。夫のサポートの大きさはフルタイム、専業主婦、パートの順であった。

核家族のメンバー以外のサポート（自分・夫の両親、兄弟、親戚、近所の人、職場の人、その他友人）は専業主婦、パートのほうが多く、フルタイムで働く妻は夫の助けはあるものの、そのほかの付き合いを仕事の為に犠牲にしていると考えられる。

分散分析（仮説1、仮説2）からは、パートで働く女性は、経済面での犠牲を払っているが、その他の夫婦や友人面の機能では、専業主婦やフルタイムよりも優れている点もあり、そのためにあえてパートを選択していることも考えられる。

さらに、主観的な満足度に影響する要因を見ると、パートでのみサポートがプラスとなっている。専業主婦とフルタイムと、パートの違いが最も興味深い。経済的豊かさを求める女性はフルタイムを選択するが、人が求めるのはお金だけではない。パートで働く女性は、夫婦関係、友人と、バランスを重視しているのかもしれない。経済的豊かさは、収入によって大きく左右されるが、豊かさの指標として生活の質を全体としてとらえなければ、女性の就業継続の困難さや、就業形態の問題、そして、男女の賃金格差も縮小しないのではないだろうか。

なお、パートの賃金の低さや、本当はフルタイムを希望しているがパートしか働き口がない、という問題はもちろん存在する。これらの問題を無視することはできないが、本稿ではそこまで踏み込めなかった。また、夫婦間のサポートとそれ以外をわけて分析を行ったが、サポートをどのような対象からうけるかさらに詳しく分ける方法、あるいはサポートを一つにまとめる方法も考えられる。今後の課題としたい。

本稿の分析からは、フルタイム就業には経済的に恵まれた面があるものの、友人との関係など犠牲しなければならないというマイナスの面があることがデータによって裏付けられた。女性のフルタイム就業が進まない理由を、これまでの研究とは異なる角度から分析し、一因を示すことができたといえるだろう。パートタイムや、専業主婦を選択する背景には、友人との人間関係を大切にできるという積極的な理由があることも、今後の就業形態の選択を考える上で重要なのではないだろうか。

謝辞

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データ・アーカイブから「現代核家族調査, 1999」(寄託者: 家計経済研究所) の個票データの提供を受けました。

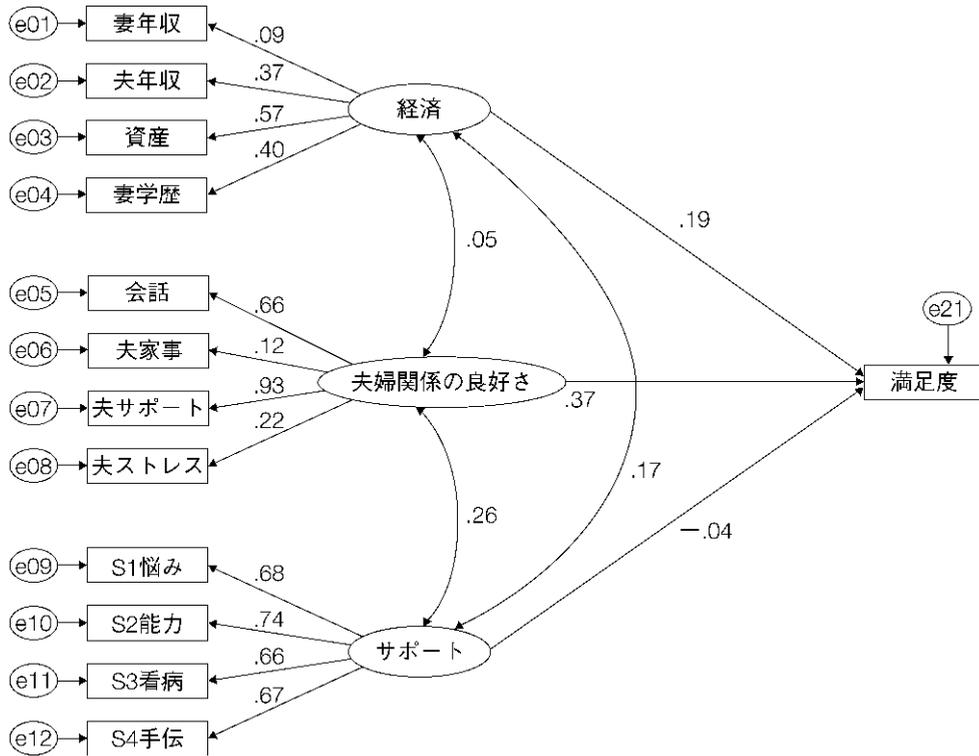
付表 1 (非標準化係数)

	専業主婦				パート				フルタイム						
	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル			
妻学歴 ← 経済	1				1				1						
資産 ← 経済	0.77	0.221	3.471	0.001	0.792	0.176	4.503	0.001	0.52	0.145	3.574	0.001			
夫年収 ← 経済	0.48	0.13	3.655	0.001	0.391	0.089	4.413	0.001	0.16	0.048	3.342	0.001			
妻年収 ← 経済	0.63	0.517	1.227	0.001	0.036	0.444	0.08	0.936	0.45	0.175	2.587	0.01			
夫ストレス ← 夫婦 関係	1				1				1						
夫サポート ← 夫婦 関係	3.58	0.953	3.754	0.001	1.442	0.236	6.114	0.001	2.24	0.456	4.907	0.001			
夫家事 ← 夫婦関係	9.29	4.897	1.898	0.058	3.021	3.62	0.835	0.404	6.23	5.892	1.057	0.291			
会話 ← 夫婦関係	4.32	1.097	3.942	0.001	2.32	0.378	6.142	0.001	2.69	0.522	5.156	0.001			
S4手伝 ← サポート	1				1				1						
S3看病 ← サポート	0.8	0.078	10.25	0.001	0.809	0.108	7.506	0.001	0.68	0.117	5.833	0.001			
S2能力 ← サポート	1.35	0.123	10.97	0.001	1.602	0.179	8.962	0.001	1.23	0.175	7.008	0.001			
S1悩み ← サポート	1.1	0.106	10.43	0.001	1.278	0.146	8.729	0.001	1.22	0.168	7.294	0.001			
満足度 ← 経済	0.27	0.065	4.151	0.001	sp1	0.271	0.065	4.151	0.001	sp1	0.27	0.065	4.151	0.001	sp1
満足度 ← 夫婦関係	2.21	0.631	3.501	0.001	sp2	0.915	0.185	4.942	0.001	pp2	0.92	0.185	4.942	0.001	pp2
満足度 ← サポート	-0	0.068	-0.68	0.5	sp3	0.15	0.078	1.934	0.053	pp3	-0	0.086	-0.263	0.793	fp3

共分散

	専業主婦				パート				フルタイム						
	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル	推 定 値	標 準 誤 差	検 定 統 計 量	確 率 ラ ベル			
経済 ↔ 夫婦関係	0.01	0.009	0.574	0.566	sc1	0.052	0.022	2.293	0.022	pc1	0.05	0.022	2.293	0.022	pc1
経済 ↔ サポート	0.1	0.038	2.654	0.008	sc2	0.101	0.038	2.654	0.008	sc2	0.1	0.038	2.654	0.008	sc2
夫婦関係 ↔ サポート	0.04	0.013	2.796	0.005	sc3	0.092	0.025	3.756	0.001	pc3	0.09	0.025	3.756	0.001	pc3

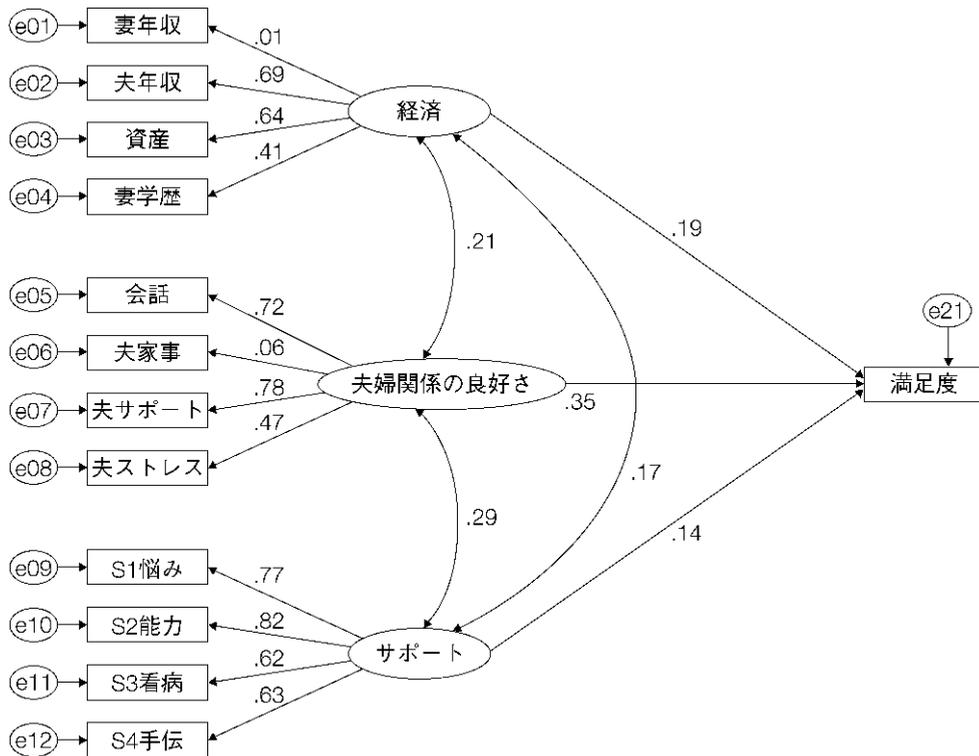
図2 専業主婦の推定結果 (標準化係数)



参考文献

- (1) 色川卓男「妻と夫で生活満足度が乖離する要因は何か：乖離要因の同一性と差異」『季刊家計経済研究』第64号，2004年，45-54ページ。
- (2) 岩井紀子「母親の就業・妻の就業」，岩井紀子，佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』，有斐閣，2002年。
- (3) 家計経済研究所編，『新現代核家族の風景：家族生活の共同性と個性』，大蔵省印刷局，2000年。
- (4) 木村清美「家計内の経済関係と夫婦関係満足度」『季刊家計経済研究』第64号，2004年，26-34ページ。
- (5) 重川純子「夫妻の収入バランスが夫妻関係に及ぼす影響」『季刊家計経済研究』第64号，2004年，35-44ページ。
- (6) 内閣府編『国民生活白書 平成13年版 家族の暮らしと構造改革』，ぎょうせい，2002年。
- (7) 永井暁子「日本で顕著な性別役割分業意識」『季刊家計経済研究』第61号，2004年，90-91ページ。
- (8) 野沢慎司「家族の連帯性とパーソナル・ネットワークー夫婦・親子間韌帯の構造分析」『季刊家計経済研究』第49号，2001年，25-35ページ。
- (9) 山本嘉一郎，小野寺孝義編著『Amosによる共分散構造分析と解析事例 第2版』，ナカニシヤ出版，2002年。
- (10) Anand, Paul and Hunter, Graham, The Development of Capability Indicators and their Relation to Life Satisfaction The 5th International Conference on the Capability Approach:

図3 パート推定結果 (標準化係数)



Knowledge and Public Action, 11-14th September 2005, Paris, France.

- (11) Nussbaum, Martha Craven, *Women and human development: the capabilities approach*, New York: Cambridge University Press, 2000, マーサ・C. ヌスバウム, 池本幸生, 田口さつき, 坪井ひろみ訳, 『女性と人間開発: 潜在能力アプローチ』, 岩波書店, 2005年。
- (12) Sen, Amartya, *Inequality reexamined*, New York: Russell Sage Foundation, 1995, 池本幸生, 野上裕生, 佐藤仁訳 『不平等の再検討: 潜在能力と自由』, 岩波書店, 1999年。

(注)

- (1) 選択の結果ではなく、やむなくパートで働いているという問題も、現実には存在するが、本稿ではこの点は取り上げない。
- (2) 例えば、ニュージーランドと日本の比較した調査として、永井 (2004, 91ページ) があげられる。
- (3) Anand and Hunter (2005) はイギリスのデータを用いて、人生の満足度 (主観的 well-being) を従属変数に、独立変数に65個の指標+仕事をしているかどうかのダミー変数+仕事を探しているかどうかのダミー変数で、回帰分析を行った。有意であったものが19個 (二つのダミー変数を含む) であった。この研究では、仕事をしていることも仕事を探しているも、全変数を投入した場合は非有意、ケイパビリティに関連のあった17変数のモデルでは有意だった。ただし符号はマイナスなので、仕事をしているほうが人生に不満足という結果である。
- (4) 生活の質は、「個人の福祉」、「生活の良さ」と見ることもできるが、本稿では生活の質に用語

を統一する。

- (5) サポート受けることのできる人の数は、サポートの必要性をあらわしているとも考えられる。人数が多いほうが、生活の質が高いと一概には言えないが、サポートを受けたくても受ける相手がいない場合より、いるほうがよい、と判断した。

図4 フルタイム推定結果 (標準化係数)

